

すてきなふる里を,子どもたちに

加藤 和子

石川医療技術専門学校

懐しい清水さん。あなたが訪ねてくれた 10 年前に始めた子ども劇場の活動, 私は未だに助産婦活動の延長線において続けています。

子どもには本物の文化を

27 年前, テレビが一般家庭に普及し, 子どもたちがテレビの前に釘づけになって, 外で遊ぶことも忘れて何時間でも一方的に流れてくる音・映像のなかにいる, このような子どもの姿に危機を感じた母親たちが, 子どもたちに, すぐれた内容を持つ生の舞台芸術を与えよう, そうすることにより深い感動を与え, 本物とニセ物を区別する力を養い, 創造性と自主性を育て, 夢とたくましさを持った子どもに……と“子ども劇場”という団体を組織しました。この会は単に良い文化を会費を出しあって安く観るだけでなく, 地域での子どもの自主性と創造性を育てる活動(子どもの集い, 人形劇の集い, 子ども祭り, キャンプなど)を進め, 子どもと親とで構成される会で, 石川県で 7000 人, 全国に約 60 万人の会員がいます。

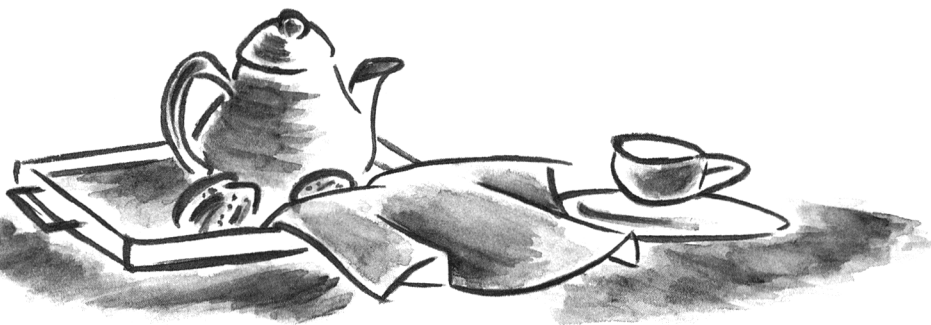
私が石川県に移り住んだ 15 年前, 金沢の 2 つの劇場をはじめとして県内には 5 つの劇場があり, 6 番目の劇場をめざして私の住んだ町の隣の市の母親たちが活発に動いていました。さっそく, 子どもを通して知り合いになった母親を集め, サークルをつくり, 仲間に加わりました。田んぼの真んかにできた団地のわが家からホールのある市の中心部へはバス(1日6本), そのバス停まで徒歩 20 分, 公演当日は母親と子どもたちみんなでゾロゾロと歩いてゆき, 帰りは都合のつく誰かのお

父さんの車に分乗する。公演が金沢の場合には大型バスをチャーターし, あちこちの町を巡回させて会員を乗せてゆくという方法もとりました。バスのなかでの長い時間を楽しく過ごそうと子どもたちと頭をひねり, ゲーム, クイズなどを準備して楽しみました。ホールが遠くて観に行けないという理由で入会できないということのない劇場にしました。

行きはよいよい帰りはこわい——金沢の公演中に突然雪が降ってきて, しかもどんどん降り積もり, 帰りのバスがチェーンを持たず, そろりそろりと走ってやっと家に着いたら夜 11 時ということもありましたっけ。

子どもとともに育つ

観るだけでなく, 自分でもやってみたくなるものです。子どもは舞台の影絵や人形劇を客席から楽しんだら, 裏を見たくなり覗きに行きます。そして自分たちでもやろうということになり, 影絵ペプサート“シンデレラ”が始まりました。練習場はわが家の車庫。シャッターをおろし, 窓に黒いビニール袋を張り, 真んかに物干し竿に白いシーツをかけてスクリーンを作り, 500 ワットの電球で照らして練習。練習が重なると, ぐたびれて床に寝転んで出番を待つので, 顔も体もほこりと汗ですさまじいこと……。ちょうど 9 月の残暑の厳しい頃でした。さあ, 準備整って団地内の保育所・老人施設へと公演をうちに行きました。たくさん拍手とおみやげをもらって意気揚々と帰りました。



● たくさんのことをしましたが、何といっても圧巻は親子キャンプ。ここはなぜかお父さんたちが子ども以上にハリキッテ動いているのです。子どもは子どもでテントのなかで、親たちは焚火のまわりで夜が明けるまで話し込んだものです。

劇場の会員のみなならず、もっともっと多くの地域にいる子どもたちに生の舞台の感動をと、役場や学校へ何度も足を運び、保育所・学校・公民館を無料で借り、地域での公演を毎年持ちました。

あれも、これも、子どもと一緒にしてきた10年間ですが、思い出すのは一緒にいたわが子の顔だけでなく、あの子、この子そしてその子の親の姿。子どもの成長にあわせてやってきたことですが、親もともに成長したんだと感じます。そして子どもの仲間づくりといいながら、実は親の仲間づくりをしていたんだと思います。

● 子どもが自分の周りから離れるにしたがい、私の活動も外へ外へ広がり、2年前、石川県で開催された国民文化祭にあたり、県下の劇場の母親と“舞台芸術フェスティバル”を企画しました。記念事業になればと、県の担当者とかけあっても埒があかないので、勝手に、国民文化祭記念事業だとして、海外の団体も含め8つの団体による公演を、県下41市町村のうち33市町村で109ステージ(回)持ちました。総観客数およそ2万5千人。対象年齢の子ども4人に1人が観たことになります。この結果をもって、『国民文化祭は、子ども劇場佐渡祭典に感激した当時の文化庁長官三浦朱門氏が発案されたものです。子ども劇場こそ本家なんですよ』と、莫大なお金を投入して催されるイベン

ト国民文化祭と、手作りの子どものための舞台芸術フェスティバルとの、いったいどちらが国民のものなのかと県知事に会って言ってやろうと息まいていたのですが、忙しさにまぎれてしまいました。

感性

子ども劇場を通して、たくさんのお会いがありました。創造団体の人たちとの出会いは、劇場ならではのものです。昨年、尊敬する舞台芸術家が亡くられました。その方の言葉の一つ一つが、今、宝物のように思えます——貧しい時には皆、こうでありたいって夢を持つし、その夢がバレエや言葉や芸術とピタッときた。今は物が豊かですから、そういう夢がなくなっている。お金さえあれば何でも買えて自分の夢がかなえられる——でも、本当の豊かさって何でしょう。

いいものを観せれば、子どもなりの感性で受け止めます。子どもが何に感動するか、個性によっていろいろあるし、絵かもわからないし、言葉かも、科学かも、そういう環境をつくり、触れるチャンスを大切にしてみる。子どもの頃の自然などの原風景みたいなもの、そのイメージは大人になってからも大事。感性って、子どもの頃からずっと自分のなかに育ったものがあるのです。

* * *

バトンを敦賀で開業されている瀧沢和子先生にお渡しします。瀧沢助産院で出産されたお母さんたちの力でなされた“おへその会”の10周年フォーラムの成功おめでとうございます。